

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺

住職 大島 祥明



葬儀の本質は、「本人」に 死んだことを悟らせることにある

僧侶の執り行う読経や作法というのは、遺体のすぐそばにいます。そして、身体があれば「本人」に対して「あなた、あは、亡くなったのですよ」と、繰り返し繰り返して教えることなのです。

と次第に悟っていくわけですが、身体があれば「本人」に対して「あなた、あは、亡くなったのですよ」と、繰り返し繰り返して教えることなのです。そういう全体の様子を見て「本人」は、

「ああ、自分は死んだのかもかもしれない。」

「どうも死んだようだ。そうか、死んだのだ。」

未練を絶ちきらせていくのが通夜であり、葬儀の本質的な意義なのです。



死んで、終わりではありません。殺して、終わりではありません。

死んでも、心は変わりません。

悔いなく、未練なく、恨みなく、

恨まれることもなく、生きることを。

死んでも、心はいまのまま。

だから、この「いま」が大切なのです。



■大島祥明著『死んだら
おしまい、ではなかった』
より引用。

▽問い合わせ ☎03-3239-6221 (PHP
研究所書籍第一部)

■1944年大阪市生
まれ。仏教大学・同大学院
修了(文修)、浄土宗僧正。
87年12月、船橋市上山町
に大念寺開山。08年5月、
同市馬込町に新寺移転。